

紙づて

山中伸弥京都大教授が先月、ノーベル賞を受賞した。iPS細胞の発見からわずか六年。まだ五十歳の医学者。節度あるさすががしい気迫が国民を励ましてくれる。再生医療、創薬への真摯な願いが実現するこ



とを期待したい。

ノーベル科学三賞は米国の研究者が圧倒的でおよそ半数を占める。二〇〇〇年以降、米国籍の南部陽一郎博士を含めると日本が十一人で英国と並ぶ二位。今後は創造性豊かな後進の活躍、特に日本人女性受賞者の出現を心待ちにしている。

科学研究の中心は移動する。近代科学は二十世紀半ばまでは欧州の独壇場。やがて大西洋を西へ渡った。ナチス政権に追わ

治良の依野

ノーベル賞と科学立国

れたアインシュタインはじめ、第二次大戦後「国破れて科学あり」のドイツから有能な科学者が米国へ移動した。新しいアジアの時代に科学の拠点はさらに西へ太平洋を渡って日本か中国に移るのか。一九八一年、福井謙一博士のノーベル賞受賞に際し、ノーベル財団のベルイストレム理事長はこう予測した。「近年の米国の科学研究への強い支持が、欧州の優位を覆した。今後二十年間は欧州と日本の研究の発展が米国の優位性を徐々に減らすだろう」

日本人受賞者十六人のうち五人が海外への頭脳流出組。三割という異常な割合は、科学人材育成が不適切だったことを示す。いつになったら日本で研究した外国籍の人たちが賞を受けらるだろうか。それが当然の時代が来て初めて、科学立国と言えるのではないか。世界の最優秀の研究者にとって、特に魅力ある環境をつくらなければならぬ。(理化学研究所理事長)

2013.1.7